

カルメル山登攀：京・江戸・博多、そして巴里： 12

南野， 森
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7182149>

出版情報：福音宣教. 77 (1), pp.4-5, 2023-01-01. Oriens Institute for Religious
バージョン：
権利関係：





京都カルメル会の創立25周年記念で、修道院の禁域が信徒らに公開されたことがあった（1984年11月3日）。洛星中・高等学校の受付で働いておられたNさんに連れられて、中学2年生の私は大興奮！

ール師が、「神に感謝という意味のラテン語です」と教えてくださった。洛星の近くにはヨゼフ会の経営する病院もあり、「普通の」修道服を着たシスターなら私も見慣れていた。しかしカルメル会のシスターは、ヴェールの下にあって頭部を白い布で包んでおられ、髪の毛や耳、顎から下の部分が見えないし、足下まで届く長い修道服で全身がすっぽり包まれている。活動修道会のシスターとはかなり趣の違うお姿にも、すっかり驚かされてしまった。

1度修道院に入ると外には出ないという禁域での生活。クッキーやクリスマスカードを作り販売することがおそらく唯一の収入源。朝から晩まで、平日も休日も関係なく、祈り、念禱と霊的読書、労働の繰り返し。当時「あけぼの」というカトリック雑誌があつて、その女子修道院めぐり特集などをむさぼり読んで、これは凄い修道院があるものだ、と感嘆したことを覚えている。

当時の洛星にはカルメル会の霊性が大好きな職員Nさんもおられ、その後私は彼女にも導かれ、西宮にも宇治の男子カルメルにも連れて行ってもらった。中高を通じ、私はカルメル・ファミリーに霊的に大変お世話になったのである。

大学進学で東京に出てからも京都との手紙のやりとりは続いていたし、初めてベルギーを旅行した時にはガブリエル母様の出身修道院にもお邪魔した。しかしそれから何年も経ち、私自身は、いつの間にか、まるで放蕩息子のようにどこかへ消えてしまっていた。さてカルメルシスターたちは……。いつか機会があれば、書かせていただくか。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の内山奈月との共著で好評を博した『憲法主義』（PHP文庫）ほか著書多数。

京・江戸・博多、そして巴里

南野 森●憲法学者



12 カルメル山登攀

ヴィアートル会のアラール神父（本連載の2022年1月号を参照）には、実に様々なことを教えていただいた。受洗前の中学1年生の私が「観想修道会」の存在を知ったのも、師を通してであった。

毎週1回、放課後に開かれる「宗教研究」の時間だったと思う。アラール師のグループに入っていた私と数名の同級生は、師に連れられて校外を歩くことになった。北野天満宮の近くにある学校から西大路を少し北上すると金閣寺があり、そのすぐ北に、京の夏の風物詩「五山の送り火」の一つである「左大文字」の山がある。その中腹、とても急な坂道を登ったところに、カルメル会があつた。正式名称は、「女子跣足カルメル修道会」の「お告げの聖母修道院」である。

日本の女子カルメル会は、1933年、フランスから来た修道女により東京に創立されたのが最初で、終戦直後には東京から西宮が創立され、さらに1951年にはベルギーからの修道女によつて福岡が創立された。京都カルメルはこの福岡から1959年に創立されたもので、私がアラール師に連れられて行つた時には、ベルギー人の創立者メール・ガブリエルがまだお元気でいらつしやつた。

何の飾りもなく、お茶もお菓子も出ない応接室は、こちらとあちらが格子窓で仕切られており、向こう側には院長様とガブリエル母様が、こちら側にはアラール師と男子中学生。なんとも不思議な空間であつた。何をお話ししたかはもはや思い出せないが、面談の最後にアラール師がガブリエル母様を祝福され、それに対して母様が「デオ・グラティアス」と答えられたことだけは覚えている。アラ